

《研究展望》

中米先住民のアメリカ合衆国への移動と 故郷の共同体・地域の変革の可能性

— メキシコ、オアハカ州の例を基点としての記述と論評 —

黒田悦子

本稿の目的は、1990年代から顕著になった中米（メキシコの北端からパナマの南端に至る地理的空間）からアメリカ合衆国（以下、アメリカ）への先住民の労働移動の概要と仕組みを最近の研究例に基づき提示することである。

研究例の多いメキシコ、オアハカ州の例からみて、アメリカの移動先でのサバイバル・モデルと故郷の共同体・地域との協力関係は明らかである。同じムニシピオ（共同体、村、町）出身者がアメリカの移動先でアソシエーションをつくり相互扶助を実行し、さらに故郷のムニシピオの祭りや行政に支援を繰り返し、影響力を発揮する。このアソシエーション形成力はムニシピオを超えて、民族、複数民族、州のアソシエーション形成にまで及び、本国での地域、州、国の政治にも変革をもたらしている。

上記の視点を基点として、メキシコやグアテマラなど中米の先住民の移動の様々な姿を文献で可能なかぎり記述し、論評していく。それをもとに中米先住民がアメリカでつくるアソシエーションと故郷の共同体・地域との関係の図式化を試みた（図1）。本文の各事例の理解に役立つはずである。

はじめに——中米先住民の北へのトランスナショナルな移動

まず、「中米先住民」と記した中米（Middle America）とは、メキシコの北端（アメリカ合衆国との国境）から南はパナマの南端（南米コロンビアとの国境）に至る地理的空間のことである。この地には8つの国が存在し、先住民がやや一定の居住地域を占めてきた。とくに、メキシコとグアテマラには多数の先住民が住み、言語民族集団（以下、民族）¹⁾の数も多い。その他の国々においても、先住民の多くは少数民族化しながらも、国家の関心事であり続けてきた。これら中米先住民が20世紀後半、とくに1990年代から北上し、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）やカナダへ移動することが注目を集めてきた。それは、なぜなのだろうか。

中米において先住民といえば、定着性が強く、動かないという印象が一般的にはある。

しかし、そうではなく、先スペイン期においても移動はあったし、スペイン支配の植民地時代には先住民はかなり移動している。征服者に従軍したナワヤトラスカラの人々の例もあるし、使役によるものもあった。スペイン系の人々の住む都市や町へのサービス業のために、その近隣に居住区をつくる例もあった。これは都市化の始まりと考えられよう。しかしメキシコでは、先住民の都市への移動は20世紀半ばから増加し、年代が下るにつれ移動は加速し、アメリカへの労働移動も増えるようになった。そして、1990年代のグローバル化（Sassen 2007）の時代には、移動は都市のみならず農村地帯でも可視的となり、北の大国アメリカへの移動が顕著になってきた。この理由を考えると、国民国家の先住民統合政策が進み、村落共同体自体が激変したことで、雇用を求めて外界へ出ていく先住民は国境さえも越えることとなったのである。

この動向はアメリカ側でも察知され、国勢調査に反映された。従来、ラテンアメリカからの先住民移民はヒスパニックの分類に入れられてきたが、2000年からヒスパニック・アメリカン・インディアンという新しい分類が導入された。自己認識で40万7000あまりの人口が数えられ、ほとんどがメキシコとグアテマラからの先住民である（Huizar Murillo and Cerda 2004:281-283, Fig. 10.1）。数字は極めて少なめのものと考えられるが、先住民移住者が数えられていることが注目に値する。

メキシコでは国を代表する人類学者ギレェルモ・ボンフィル・バタリヤが、先住民社会の現在の窮状を指摘し、先住民文明の再評価を訴え、国民的注目を集めた（Bonfil Batalla 1990）。先住民の北へのトランスナショナルな移動は、彼の言う「深層のメキシコ」を壊していく要因になるのだろうか。伝統は変化していくだろうが、新しい可能性もあるかもしれない、というのが私の立場であり、その視点から本稿を展開できれば、と思う。

以下の記述と論評を理解しやすくするために、次の三点を指摘しておきたい。第一に、民族（言語民族集団）の分布は国境策定以前からのものであり、主に19-20世紀に確定された現在の国境をまたいで存在しているケースがある。第二に、難民は本稿では扱わないが、難民と労働移民との区別はむづかしい。グアテマラのマヤ系民族の場合、難民認定で入国した人々を核にして生活の場ができ、そこへ後続の移動者がくることが多く、両者の区別は困難である。第三に、本稿の基点となった既出論文（黒田 2013：第6章）で扱ったメキシコ、オアハカ州については文献に恵まれているが、その他の中米先住民のアメリカへの移動についての文献は多くない。移動は調査の難しいテーマだからである。

1 メキシコ、オアハカ州の例からみえてくるサバイバル・モデルと 故郷の共同体・地域との協力関係

ミヘ (mixe), サポテコ (zapoteco), ミシュテコ (mixteco) の例を検討すると、次の観点を得た (詳細は、黒田 2013)。

第一に、人々は常に移動し、伝統的にはローカルな村落共同体 (ムニシピオ municipio, 以下、村とも表記) →同民族地域内の村→州内→国内都市へとやや重層的に越境してきた。この動きをトランスボーダー (越境) と呼ぶとすると、その先端にトランスナショナル (国境越え) があるのは自然なことともいえる (Stephen 2007)。そして、今やこの重層的越境という考えも当てはまらなくなった。村や地域は道路で外界とつながり、IT の使用により情報は村に直接に入ってくるので、都市や外国へ渡ることが容易になった。さらに、一部の先住民は首都や都市に居住しており、そこから外国へ向かうこともある。また、ミシュテコの農場労働者は、村にきたコヨテ (coyote, 労働仲介業者) がグループで雇用していくことが多い。いずれにしても、先住民は大いに動く、動かざるを得ないのだ、という観点が必要である。

第二に、移動にも民族差がある。オアハカ州では、ミヘは人口的に中型の民族であり (メキシコの言語集団ごとの人口については、黒田 2013, 表 1 参照)、移動に不慣れであり、国外に出た場合、同州の主要民族であるサポテコ、ミシュテコの相互扶助組織 (以下、アソシエーションと総称。形態はさまざまである) に身を寄せる。民族ごとの人数と対応力が移動を容易にする現実がある。対応力は生得的なものではなく、歴史・社会経済的に形成されたものである。さらに、同じ民族でも、出身ムニシピオの状況とアメリカでの就業状況が移住者の生活を大きく左右する。そのため、本稿の第 2 節以降でも、民族と出身ムニシピオの名称を明記する。

サポテコは国内移動の長い経験があり、移動が経済活動として村落生活に埋め込まれており、この生活パターンを「移動の文化」と呼ぶ研究者もいる (Cohen 2004)。このサポテコはアメリカ、とくにカリフォルニア州へ安定的・反復的移動を行っている。一方、ミシュテコは農場労働から仕事を始める人が多く、北の大国へは不安定移動を余儀なくされている場合が多いが、カリフォルニア州、オレゴン州、ニューヨーク市に定着している例もある。

第三に、この三民族、とくにサポテコとミシュテコに共通な移動先でのサバイバル・モデルはどのようなものであり、故郷のローカルな共同体・地域との関係はどのようなのだろうか。個

人差は大きいですが、民族的集団としてみた場合、きわめてエネルギッシュに次のように動いている。

家族への送金は各人の努力で各様に行う。

同じ村落共同体出身者がアソシエーションを形成し、相互扶助を実行する。この単位は故郷の共同体（ムニシピオ）を単位とする。参加者は献金し、村の祭りを支援し、行政組織へ送金し、行政に関与する。パソコン、携帯電話などを活用し、村の役職者と交流していく。このような移民による村の統治への影響は「トランスナショナルな脈絡におけるムニシピオ統治」（Kearney and Besserer 2004）と表現されている。

ムニシピオ単位の結束は小さい範囲にとどまるので、次は民族ごとのアソシエーションが形成され、異国での自己民族意識が醸成される。さらに、必要とあれば、故郷で近くに居住していた他民族とつながりを持ち、複数民族を含むアソシエーションをつくる。さらに、機会を得て、州を単位とする組織をつくることもある。この場合、故郷の出身地域や州の政治に移民の声を送ることにもなる。

女性は活発にアソシエーションで活躍する。女性の活動にはアメリカ社会の影響もあるが、そもそも先住民社会における女性は弱くはない。さらに、彼女たちの存在はカトリックの聖母グアダルベ信仰に守られている。マチスモの上位の概念に支えられている、と私は感じている。

上記のような移動者の存在と活動は故郷に影響を及ぼし、州には移民事務所が創設され、連邦政府も二重国籍（1997年）、在外投票権（2005年）を認めてきた（黒田 2013：177、注6参照）。学術分野でも、国立移民研究所の重要性が浮上してきた。

移動者のアイデンティティの拠り所となる村落共同体、ムニシピオはグローバル化の時代でも重要であり続けるのだろうか。今のところ、そうあり得るだろう。なぜなら、1995年のオアハカ州の州選挙法はムニシピオ自治の継続を認定したからである。同州では、先住民のおおくはムニシピオに住み、植民地時代から「ならわしと慣習」（*usos y costumbres*）と呼ばれる村民の選出による行政・宗教組織（カルゴ・システム）を維持している（黒田 2013：63、81注3）。この伝統を州政府は尊重し、村組織に政党選挙を導入しなかった（オアハカのムニシピオについては、Hernández-Díaz coord. 2007）。長年続いたムニシピオ自治を州政府は尊重したのである。となると、ムニシピオはグローバル化の時代にも重要であり続ける可能性が高い。

以上がオアハカ州の移動例からみえたサバイバル・モデルと先住民共同体・地域の変革の可能性であり、詳細は黒田（2013：第6章）を参照してほしい。その後、オアハカ州

の研究例は増えつつあるが（例外的なトゥリキの例は2.4で言及する）、私が注目するのは、ロサンゼルス近郊（約20万のサポテコが居住）に住む山地サポテコのヤララグ村出身者である。彼らはムニシピオではなく、その小区分であるバリオ（barrio）を単位にしてダンス、守護聖人の祭りを行っていた。故郷の村でのバリオ間の対立（de la Fuente 1949: 26-29）の歴史が長く、このような現象が生まれた。山地サポテコの主要村落であるヤララグは19世紀から州、国の政治に巻き込まれ、政争が絶えず、ムニシピオはまとまらず、バリオ中心の生活となり、その祭礼を中心にまとまりができる傾向となり、それがロサンゼルスにまで持ち越された、と指摘されている（Cruz-Manjarrez 2013: 82-96）。

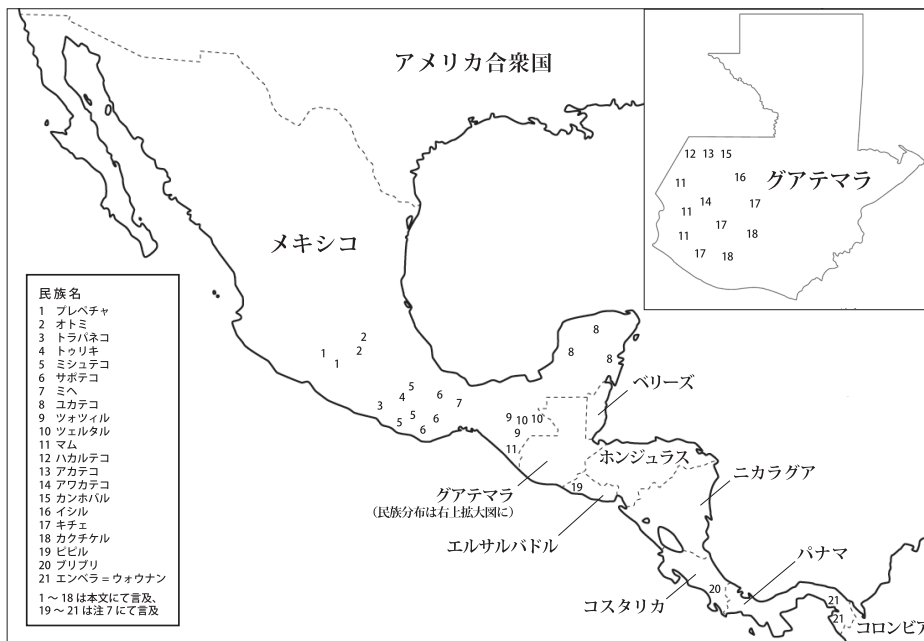
この例は、ムニシピオ単位のアソシエーションの組織化という説には反証となる。そこで、さらに検討すると、やはりムニシピオが出てくるのが分かった。移住者にとって、バリオのまとまりはあまりにも小さく、ムニシピオ単位のまとまりが必要になったのである。2004年、村出身者はユニオン・サポテカ（Unión Zapoteca）をつくり、村の政治には関与せず、教会の改築、祭礼などに貢献している。行政と宗教を分離した活動である。そして、このユニオンはアメリカ側においては、その視野を広め、カリフォルニア州のオアハカ州移住者を広く結ぶカリフォルニア・オアハカ先住民共同体・組織連合（FOCOICA, Oaxacan Federation of Indigenous Communities and Organizations in California）に参加した（Cruz-Manjarrez 2013: 92-96）。

以上が、オアハカ州の例からみえたサバイバル・モデルとローカルな共同体・地域の変革の可能性についての予備的結論である。これを移動現象をみる基点として、他の中米先住民の様々な例を以下に記述・論評していく（地図1, 2）。

2 メキシコの他の民族の移動例

この国はアメリカと国境を接しているので（様々な様態については、Hendricks 2010）、先住民の間でも、「アメリカへの夢」（sueño americano）が語られるほどである。その夢が簡単でないことは1990年代には認識されているが、それでも移動は続いている。メキシコの北から南の順で移動例をオアハカ州のモデルを基点にして比較検討してみる。各民族の動きを数少ない文献を駆使して追跡し、「民族の地景」（エスノスケープ）（アパデュライ 2004: 69, 96）を眺めることにしよう。

地図1 中米先住民族の分布 (本稿で言及された例)



(James W. Dow and Robert Van Kemper (eds.), *Encyclopedia of World Cultures*. Vol. VIII, *Middle America and the Caribbean*. Boston: G. K. Hall, 1995, Map2, 3, 4 をもとに作成。
 グアテマラについては国立民族学博物館特別展図録『現代マヤ—色と織に魅せられた人々』1995, p.9 八杉佳穂作成, 表1 マヤ諸語分類表をもとに作成)

地図2 アメリカ合衆国内の中米先住民の移動に関わる場所 (本稿で言及された報告例より)



2.1 プレペチャ (purépecha)

プレペチャの住むミチョアカン州はオアハカ州よりも外界との接触が絶え間なくあり、第二次世界大戦以降、メキシコ・シティへの移住やアメリカへの移動がいち早く起こった。移動は生活に埋め込まれている。

調査報告例のあるのは、プレペチャ山地のチェラン (Cherán ムニシピオ) からイリノイ州南部ユニオン郡のコブデン (Cobden) 村への移民である (Anderson 2004)。チェランでは、住民の約 25% が移動の経験者である。1959 年頃、最初の移動があり、ブラセロ・プログラム (第二次世界大戦中と戦後、アメリカでの移民労働者の需要が増え、1942-1964 年、メキシコ人のブラセロ (bracero, 腕を貸す人) がのべ 460 万人も入国許可された移民政策) の終わりに近い 1962 年までに、8 人が行き、そのうちの 6 人が移住先の桃とリンゴの果樹園で働き続けた。移動は 1980 年代に恒常的になり、チェランからの移民は増加した (この頃、コブデン村にはメキシコのグアナフアト州、ハリスコ州などからメキシコ人、メキシコより南の国々からの移民も入ってきた)。リンゴの収穫期には、チェランから多勢の臨時労働者が呼びこまれるが、祭りには戻っていく。1990 年代初頭、コブデン村の近隣とケンタッキー州の工業プラントで働く機会があったが、チェラン出身者はコブデンに居続けた。2000 年、コブデン村の中心にチェラン出身者がメキシコ食品店を開いた。

移民は家族への送金を行い、チェランの守護聖人の祭りには帰る。同郷者の結びつきは強く、町の教会の修復には献金する。1980 年代から、コブデン村のカトリック教会の司祭はメキシコ・シティに近いトルーカの町からくるようになった。

チェラン出身者のムニシピオ単位のアソシエーションはないが、コブデン村にはヒスパニック・スポーツ委員会、学校のバイリンガル教育プログラム、デイ・ケア・センターがあり、生活を支える一助になっている。

なぜ、チェランの人々は、アメリカ中西部の村に居続けるのか。故郷のような生活のしやすさを探し当てたからではないか、と研究者は判断している (Anderson 2004: 376, 380-381)。

同じくプレペチャ山地のティンガムバト (Tingambato ムニシピオ) の中心地は先住民村ではないが (プレペチャ語話者なし)、比較例として考察に値する。以下は川本直美氏²⁾ のムニシピオの中心 (cabecera) での観察に黒田が論評を加えたものである。

ティンガムバトは州都モレリアと州第二の都市ウルアパンを結ぶ幹線道路沿いに位置し、開けたところである。村の行政職の選出は政党選挙で実施され、PRD (民主革命党)

が優勢である。第1節で述べたオアハカ州のたいていの先住民のムニシピオが、村人の「ならわしと慣習」で行政職者を選ぶのと異なる政治的状况がある。

役場の近くに国際送金サービスの窓口があり、移民からの送金への依存が恒常化している。送金をもとにし、店を開いたり、家の増改築をする例が見られる。親族のうちだれかはアメリカで働いている人がいて、コネも多く、国境を渡る苦勞は語られていない。非合法移民だった人も、1986年の移民法改正のおかげで永住権を得て、カリフォルニアと村の両方に家を持っている人もいれば、帰村した人もいる。アメリカへの移動が故郷の生活に埋め込まれていることが、川本氏の文章から伺える。

アメリカの移住者間では、儀礼・祭りのための組織は発達している。贖罪のキリストの自宅訪問儀礼が各都市の移住者の間で広まり、運営組織（comisionado）ができています。2002年、この祭りはカリフォルニア州とコロラド州の諸都市に住む移住者をつなぐようになり、ティンガムバト村の贖罪のキリストへの巡礼グループを結成した。会員から集めた資金は村の教会の設備改善、祭りの実行、礼拝堂の建立のために活用されている。さらに、村の教区司祭をアメリカに招待し、スペイン語でのミサを聞く。

チェランとティンガムバトには共通点がある。1. 移民、移住が生活に埋め込まれていて、オアハカ州盆地部サボテコの例のように、安定的移動があるとみえる。2. 移住先でも、人々は儀礼・祭りを通じてつながり、故郷にも祭りを通じて関わる。

なぜ、この二つの共同体の人々はムニシピオの行政に関わらないのだろうか。移住地での日常生活には同郷者の結びつきは強く、あえて組織化する必要がないのだろう。他の理由として考えられるのは、故郷の共同体は政治に巻き込まれていて、祭礼など宗教面では関与できても、政治には距離を置く必要があるのではないだろうか。ティンガムバトの行政職は政党選挙による選出なので、この推測は十分あり得る。チェランも政党選挙を導入していた共同体であるが、2011年頃から森林資源をめぐる争いが起こり、政党選挙から離脱し、自治共同体に戻った（Pressly 2016）。このように政争が多いので、移住者・移民が政治に関わらないのだろう。

2.2 オトミ (otomí)

メキシコ先住民で5番目に人口の多いこの民族は、イダルゴ州メスキタル盆地とイダルゴ、プエブラ、ワステカ3州の山地のオトミに大別できるが、いずれにおいても、ムニシピオが行政・宗教組織の単位である。メスキタル盆地には28のムニシピオがあり、オトミの人口密度の高いムニシピオの一つがイシュミキルパン（Ixmiquilpan）である。

その人口約 10 万人（ほとんどがオトミ）のうち 5 分の 1 はアメリカ、フロリダ州のクリアウォーター（Clearwater）という観光都市へ出稼ぎ・移住している。1980 年代初期から始まり、1990 年代に顕著になり、2000 年代、この都市の重要な労働力となり、市の活性化に貢献している。一般のメキシコ人も多く、経営するビジネスは 50 余りである（Schmidt and Crummett 2004, 以下の記述も同論文による）。

クリアウォーターには、オトミ移住者の強い結束があり、資金を故郷に送り、道路・水路・ムニシピオの建造物・学校・教会の建設に役立てる。さらに、新ビジネス（手芸、観光、洗髪剤と竜舌蘭のスポンジ製造など）を起こした。この活動は故郷の共同体、地域、州におけるオトミ民族アソシエーションの活動に直接繋がっている。

故郷のイシュミキルパンには 1970 年代に同民族出身の人類学者が参与した農村教師会があり、この組織の教師がクリアウォーター市へ行き、リーダーとなり、スポーツ連盟や祭りを組織した。さらに、オトミ文化を保護・促進するニャーニュ（オトミの自称）最高評議会（Consejo Supremo Hñahñu）の出先事務所をつくり、移住者の支援組織として動いた。

この支援組織はイダルゴ州出身のメキシコ人と連携を図り、市職員に対応する。さらに、活動を広げて、タンバ低地のメキシコ評議会を組織し、教育・健康・移住者の権利のために外部組織と協働する。メキシコ領事館にも働きかけ、故郷のイシュミキルパンとクリアウォーター双方のオトミ生活者の安寧を図る。

オトミのムニシピオの人口は大きく、移動人口も多く、組織力はムニシピオ、民族を超え、メキシコ人と連携し、領事館とも接触している。これは、中央メキシコで外界と常に対応しつつ生存してきたオトミ民族の文化力に加えて、移住先が小観光都市という環境もプラスに働いているのではないか、と思われる。

2.3 トラパネコ (tlapaneco)

ゲレロ州山岳部に住むこの人々もアメリカへ出稼ぎに出ている。小林貴徳氏 (2014) によると、ある青年はコヨテの仲介で国境の町ノガレスにつき、アリゾナの砂漠を通り、越境した。ロサンゼルス繊維工場に 2 年働き、帰村したが、1 年もたたないうちにまた越境し、ロサンゼルスで同郷人と暮らし、貯蓄し、帰村した。村落共有地でケシを栽培し、生アヘンをつくり、ブローカーに売る。

小林氏によると、ニューヨークのマンハッタンにトラパネコのコミュニティがあるらしい³⁾。

2.4 トゥリキ (triqui) (オアハカ州の補充例)

オアハカ州ミシュテカ・アルタとバーハの間に住み、土地争いが絶えず、オアハカ市やメキシコ・シティへの避難者や移住者が多い。アメリカへの移住者にも窮状がうかがえる。

第一例は、カリフォルニア州、モンテレイ郡グリーンフィールド (Greenfield) の報告 (Johnson 2004) で、200人ほどのトゥリキ (ムニシピオ名は不明) が他のオアハカ州出身者に近接して住んでいる。この町はシリコンバレーの南に位置するサリーナス盆地にあり、農場労働者として働いていける。トゥリキの三拡大家族が三つのアパートに集住し、同民族の人々の寄りあう場となっている。彼らは人権団体の助けを得て、国境を渡り、非合法農場労働者となった。シェリフ (郡保安官) に追われる生活であるが、アメリカ市民の人権団体、メキシコ領事館 (在サンノゼ)、UFW (統一農場労働者ユニオン。セサール・チャーベスによる創設)、メキシコ系移民二世が参加する町評議会が支援している (Johnson 2004)。

トゥリキの窮状は医療人類学者による第二の研究例 (Holmes 2013) でも明らかである。

サン・ミゲル (ムニシピオ) から青年たちがアリゾナ州の砂漠を越え、カリフォルニア州にたどり着き、北上し、ワシントン州スカギット (Skagit) 盆地で農場労働者になる。ここには、5月にメキシコ人、ミシュテコ、トゥリキなど約千人が雇われてきて、チューリップ、リンゴ、ベリーの摘み取りを行い、掘立小屋で暮らす (Holmes 2013:1-17, 45-47)。

第三世代日系アメリカ人により経営されている Tanaka 農場は従来の作物に加え、高級イチゴの栽培をはじめ、大手食品会社へ納入している。約250人の移動労働者の間には作業グループに上下差が歴然としてある。上から、アングロ・アメリカ人と日系アメリカ人、次にアメリカのラティノ、その次にメスティーソ・メキシコ人、その後にミシュテコ、最後にトゥリキが配置される。それでも、トゥリキが望むのは、合法的臨時労働者資格であり、ここで稼いで村での家族生活を維持したいと考えている。時々起こる労働条件改善のためのストライキに参加し、日常生活ではアメリカ側のソーシャル・ワーカーにお世話になる (Holmes 2013:48-87, 177-180, 197)。

現場のトゥリキはアソシエーションをつくる余裕もなければ、オアハカ州の民族組織 MULT (Movimiento de Unificación y Liberación Triqui, トゥリキ統一解放運動) が支援できるわけでもない。アメリカ側の人権組織や支援組織に頼るよりない。

2.5 ユカテコ (yucateco)

ユカタン半島に住むユカテコ（・マヤ）のアメリカへの移動は遅れた。その理由は、エネケン（竜舌蘭の一種。繊維の原料）栽培（初谷 2009: 第 8, 9 章）による雇用の拡大、鉄道網の未発達、1970 年代のカンクン観光業による農村人口の吸収があげられる。最初のアメリカへの移動は 1960 年代のブラセロ・プログラム（メキシコでは 1942 年に開始、ユカタン半島では 1950-60 年代に始まった）に参加したものであり、1980 年代になってから移動者は多くなった（Adler 2004: 10-16, 21, Cornelius, Fitzgerald and Lewin Fischer eds. 2007:36, 44）。

ユカタン半島北部、メリダ、カンクンからバスで 4-5 時間のムニシピオからの移動者について三つの報告がある。

第一例として、ウシュマル遺跡に近いオシュクツカブ（Oxkutzcab）は移民を送り出す町として知られ、国際送金の店がある。新しい家は移民が建てたものであり、サンフランシスコのマヤ・タウンが語られる。しかし、このマヤ・タウンについては次の散見的情報しかない（Burke 2004）。1990 年代、ユカテコが増え、チアパス州やグアテマラからの移住者と混ざって暮らしている。マヤ人口は全体で 1 万ぐらいとされるが、そのうちオシュクツカブからの移住者が何人かは不明。1960 年代後半にブラセロ・プログラムに乗ってアメリカに来た人の娘が州の民主党へのラティノ代表審議員になったり、マヤであることを再認識した女性が近くのオークランド市のグルーボ・マヤ（grupo maya）に入り、太陽儀礼に参加している。このグループはグアテマラ難民が組織し、エルサルバドル難民も参加している（Burke 2004: 350-353）。

第二、第三例は似かよった例である。カール（Kaal, 著者の配慮による仮名）からの移民はテキサス州ダラスのエスニック居住区に住んでいる（Adler 2004）。トゥンカス（Tunkás）からの移民の場合、カリフォルニア州、アナハイム、サンタ・アナ、イングルウッド（ともに、ロサンゼルスに近い）に住んでいる（Cornelius, Fitzgerald and Lewin Fischer eds.2007）。両者には共通点が多い。

第一に、1980 年代からの移民で、一世代目の人々である。第二に、移動には、家族・親族・知人・友人のコネが役立ち、コヨテの仲介で越境した非合法移民が多い。両国の往来は気楽に行われており、アメリカからカンクン空港まで 99 ドルという格安便まである。第三に、家族への送金は積極的に行われ、稼いで帰郷する人も多い。家の増改築、新ビジネスの立ち上げなどに投資する。第四に、故郷の家族儀礼、祭りのために送金する。アメリカ滞在地でも、家族儀礼、ダンスの会、祭り、スポーツ・クラブ活動を行う。第

五に、カールの人々の場合、居住区域が同じなので、以上の活動により人々が自然に集まることになるからだろうか、ムニシピオ単位のアソシエーションはこの調査時点では組織されていない。しかし、トゥンカスの人々の例では、HTA（ホームタウン・アソシエーション）をつくり、資金を集め、故郷へ送金し、発展プロジェクトに貢献する。メキシコ政府もこれを支援し、国・州・ムニシピオから支援金を拠出する。移民が資金を集め、両国の往来に慣れた人に託すのであるから（Cornelius, Fitzgerald and Lewin Fischer eds. 2007:64）、この関係は強い。第六に、カールとトゥンカスからの移住者は、それぞれダラスとロサンゼルス近郊で非合法移民として暮らす人が多く、移民法改正に対して関心が高い（Adler 2004:146-147, Cornelius, Fitzgerald and Lewin Fischer eds. 2007: 232-247）。

ユカタン半島で多いプロテスタント信者の移住については、これからの研究が待たれる。カールの場合、移住者はほとんどがカトリックであり（Adler 2004:25）、トゥンカスの場合、プロテスタントの浸透と移住とは今のところ関係が少ない、と報告されている（Cornelius, Fitzgerald and Lewin Fischer eds. 2007: 206）。

2.6 ツォツィル (tzotzil), ツェルタル (tzeltal), サパティスタ自治区の人々

チアパス州はオアハカ州のすぐ南東に位置するが、州内に出稼ぎ先があったので、先住民のアメリカへの移動は新しい。1994年のサパティスタ蜂起、1998年の暴風・洪水災害以降に増えている（Rus y Rus 2008）。

ツォツィル民族のチャムラ村（Chamula ムニシピオ）からの移動はサン・クリストバルの町へ移住したプロテスタントの人々から2001年に始まった（Rus y Rus 2008:344, 353, 清水 2013:231）。村には近親者に越境経験者が多く、北への移動は「半ば日常茶飯事」となっている（清水 2013:207）。チャムラの人々は、ジョージア、サウス・カロライナ、ノース・カロライナ、フロリダ州に広がり、タンパの町にはチャムラが集住している（清水 2013:216, 259, 263）。仕事は農場労働が主である。

清水透氏によると、移動経路はグアテマラの人々と類似している。ポジェロ（pollero, 越境仲介者）の支援を得て始まる。メキシコの太平洋岸を北上し、ノガレスに着き、砂漠を歩き、アリゾナ州フェニックスに着き、ミニバンに乗せられ東に向かいアトランタに着き、そこから北上するか、フロリダ方面へ南下する。清水氏の知人は、アトランタでは仕事が見つからず、近親者が10年も住みなれているニューヨークのスタテン島まで向かい、ビルの清掃、補修工事の仕事に入れてもらう。チャムラの人々は二人だけだが、メ

キシコ人、ラティノとも軋轢なく暮らしている。スタテン島の知人はまだアメリカにいるが、帰国者で家を新築する人もいる。しかし、アメリカで仕事に恵まれない場合、ボジェロへの借金（Rus y Rus 2008 に詳細）で帰還できない。ある集落の未帰還率は9割に近いという。一方、村のボジェロの家は2-3階建ての「豪邸」である（清水 2013:230-272）。

チャムラのムニシピオは行政・宗教両面で争いの多い村であり、移動者と村人がトランスナショナルなアソシエーションをつくるのは困難であろう、と私は推測する。

サンフランシスコ湾岸地域にはツォツィルとツェルタルの両民族の移住者が若干いるが、チアパネコ（チアパスの人）と一括され、日雇い労働に従事しているが（Burke 2004）、詳細は不明である。

柴田修子氏によると、サパティスタ自治区もアメリカへの出稼ぎの波にさらされている。1990年代から目立ち、出稼ぎで得た資金でコンクリートの家を建てる人も出た。あるツェルタルの人の移動ルートはチャムラの例と似て、コヨテの世話で砂漠を越えてアリゾナ州に着き、ヴァージニア、ノース・カロライナ、フロリダ州へ向かい、他のツェルタルの人々と一緒に農場労働者として稼いだ。帰村後、サパティスタをやめる人もあり、自治区の村が政府派とサパティスタ派に分裂することもある（柴田 2014:53-56）。

マルコス副司令官は反グローバリゼーションを提言したが、実現はむつかしい。

3 グアテマラのマヤ系民族の移動例

2002年、マヤ系民族でアメリカに家族関係者をもつ人口は66万余という数字があり、民族ごとの数字も記されている（国際移住機関 IOM のデータ、Palma y Dardón 2008 : 112, Cuadro 4）。

この人々の移動を理解するための一般的状況に言及しよう。

第一に、内戦（1960年代-1996、激化は1978-1983）の難民から始まり（Manz 1988）、移動者は国の西部からが多い。

第二に、メキシコとアメリカの二つの国境を越える苦労があり、教会の人道支援が機能している。カトリック教会は関連する12の「移民の家」（1998年設立）を運営している（三澤 2013:131-133, 139-142）。監督派司教会の参加する「人間的な移動」（Movilidad Humana）はメキシコ全土で多数のシェルターと連繋し、メキシコより南の国々からの人々を支援している（Vogt 2013）。ただし、このシェルターが狙われ、女性移動者が危険

にさらされる (Vogt 2013:775-776)。そして、アメリカ、とくにアリゾナ州トゥーソンでは、プレスビテリアン教会の「聖域運動」(sanctuary movement) 関係者が活動し、非合法移民を助け、仕事のある地域へ移送している (García 2006: 98-108)。同州のフェニックス市の周辺部にラ・ウェルタ (La Huerta 果樹園) と呼ばれる、人が隠れやすい茂みがあり、主にグアテマラとチアパスのマヤが集まり、人権運動家とココテの世話でフロリダ、ノース・カロライナ、コロラド、オハイオ州へと向かう。これは1980年代初めから1997年までのことだとされる (Wellmeier 2000)。興味深いのは、国境を越えて、ラ・ウェルタに着く前にトホノ・オーダム (Tohono O'odham, 旧名パパゴ) 居留地を通り、水や食料を与えられたこともある (Hendricks 2010:98-120, Wellmeier 2000:144)。

第三に、マヤの村落共同体 (ムニシピオ) は、内戦のみならず、ラディーノ (非先住民) の存在とプロテスタントの浸透により内部分裂が見られることである (Warren 1978)。

第四に、グアテマラのマヤは20ほどの言語集団に分かれているが、国土はメキシコのオアハカ州の1.16倍ぐらいの広がりであり、マヤ系民族は近接して生活している。アメリカにおいてもそうである。さらに、1990年代から汎マヤ運動が起こり、言語を超えてマヤ人をつなぐ要因になっている (Fischer and Brown eds. 1996, Warren 1998)。このような状況を踏まえて、以下に、マヤの人々の集住地ごとに移動の様子を記述・論評したい。

3.1 インディアンタウン (Indiantown), フロリダ州

19世紀中頃までセミノール・インディアンの居住地であったためにインディアンタウンと称されるこの町に、カトリックの司祭 (この町の教区司祭にして社会活動家) の紹介で最初のマヤが農場労働者としてやって来たのは1982年である。クチュマタン山地のウエウエテナンゴ県のムニシピオであるサン・ミゲル・アカタン (San Miguel Acatán) からのカンホバル (q'anjob'al) 民族の9人であった。その後、単身の青年移民が増加し、町の一部に集住した。この人々の民族構成は、アカテコ (akateko), ハカルテコ (jakalteko), マム (mam), キチェ (k'iche') であった。レモン、かんきつ類の収穫に始まり、建設業、野菜栽培、ゴルフ・コースの仕事に進出した。冬季の収穫繁忙期には4000-5000人もいた。ところが、農業経済が悪化し、犯罪も増え、1985年から多勢が他地域へ移動せざるを得なくなった (Burns 2000)。

1982年、この町のマヤを支援するアソシエーションであるコーン・マヤ (Corn Maya)

が人類学者と教会によりつくられ、カンホバル民族出身者のサン・ミゲル・アカタンの祭りを撮影したりしたが、内部分裂に加えてマヤと銘打つことにも批判が起り、1990年代末にはこのアソシエーションはロサンゼルスなど大都市のマヤと結ぶ汎マヤ組織への移行を示した (Burns 2000:165-169)。

3.2 マイアミ市南部の町, フロリダ州

コーヒー農園への出稼ぎの機会が減り、ウェウエテナンゴ県農村部のmam (mam) の共同体の若者はアメリカへ出稼ぎに出る (以下、小泉 2007:158-160。村の名前は伏せられている)。彼らはコヨテの仲介でメキシコとアメリカの国境を渡り、テキサス州ヒューストンに着き、さらにフロリダへ向かい、マイアミ市南部の小さな町に仕事を見つける。野菜の収穫、花の栽培、土木工事、レストランの皿洗いに従事。狭いアパートに集住し、生活を切り詰め、家族に送金する。数年間滞在し、ほとんどが故郷に戻って家を増改築し、貨物用トラックを買い、小規模コーヒー農園の経営を始めた。また、

まさに、出稼ぎの例である。

3.3 モーガントン (Morganton), ノース・カロライナ州

スモーキー・マウンテンの端の養鶏・処理場にカンホバル民族が移動してきた。インディアンタウンで述べてきたサン・ミゲル・アカタンに加えてサン・ラファエル・ラ・インデペンデンシア (San Rafael la Independencia, 以下サン・ラファエル) の二つのムニシピオのカンホバル民族出身者である。続いて、同じクチュマタン山地に住むが、県都ウェウエテナンゴに近くより開けたアグアカタン (Aguacatán ムニシピオ) のアワカテコ (awakateko) 民族の人々も入ってきた。両民族ともモノリングルが多いが、アワカテコの人々は組織力があり、死亡したアグアカタン出身者を故郷に送り返すために埋葬結社をつくり、他の民族の人も参加した。労働環境は厳しく、1995年にアワカテコの人々が中心になりユニオンが結成されたが、他のマヤ、メキシコ人、内戦経験のあるグアテマラ人、サンディニスタ革命に影響を受けたニカラグア人も参加した (Fink and Dunn 2000)。

モーガントンのユニオン活動にはアメリカの大組合組織が参入し、闘争は2001年まで続いた (Fink 2003: 第4,5章)。この経験を経たアグアカタン出身者は故郷のムニシピオ内の政争 (アワカテコ対チャルチテコ少数民族の対立、非先住民ラディーノの権力) に関心を寄せているが、敢えて政治に関与しない (Fink 2003: 189-195)。宗教面でも、ムニシ

ピオ内にカトリック教会の分裂と福音派教会の進出があり、アメリカへの移住者は祭りに資金援助をすることもない (Fink 2003: 57-60)。

労働環境の厳しい農場では、ムニシピオ単位の埋葬結社ができ、必要に駆られて他の民族の人々も参加し、さらに先住民の枠を超えた労働者のユニオンが組織されたことが注目に値する。

ここから、都市へのマヤ移住者を見ていく。

3.4 プロヴィデンス (Providence), ロード・アイランド州

この州都にキチェ民族がグアテマラ人に混じって住んでいる。エル・キチェ県の小さな山村シンシュク (Xinxuc ムニシピオ) からの人々で、最初の移動は1984年、内戦から逃れて、同村のキチェとラディーノ (非先住民) の一群が同市に着いた (Foxen 2007: 97)。今では、大多数のキチェ移住者は同市のエスニック居住区 (エル・キチェ県とグアテマラ東部からのラディーノ、ドミニカ移民、プエルトリコ人、アフリカン・アメリカン、カンボジアとラオスの難民などが住む) に住んでいる。宝飾店、織物業、魚缶詰め工場、レストラン、庭園で仕事に就く (Foxen 2007)。

本国でもともとあったムニシピオ内の争いと内戦時のムニシピオの分裂が影響し、さらに、非合法移民として摘発されることへの恐れから、人々は組織化を避けている (Foxen 2007:126-132)。同市に住んでいる高学歴のラディーノが、ロード・アイランド州のグアテマラ系アメリカ人のアソシエーション (GARI, Guatemalan Americans in Rhode Island) を組織しているが、その企画にほとんどのキチェの人は参加しない (Foxen 2007:119-121)。

3.5 ヒューストン, テキサス州

1978年、キチェ民族のサン・クリストバル・トトニカパン (San Cristóbal Totonicapán ムニシピオ) 出身者が移住し、以降、同ムニシピオとサンタ・クルス・デル・キチェ (ムニシピオ) からも多くの人々が移住し、3000-4000人に至った (1980年代)。男性はビルの保守点検、女性は家事サービスにつき、故郷から希望者を呼び寄せた。ヒューストン市ではメキシコより南の国々からの移民の多い居住区に住む。コミュニティの福音派教会、クリニック、サッカー・チームなどがあり、人的交流、新来者や病人への支援、故郷への死者の移送に協力する。また、サッカー・チームが募金しムニシピオの守護聖人の祭り (カトリック) には送金する (Rodríguez and Hagan 2000:197-202)。

トトニカパン（1984年のムニシピオの人口は約2万人）では、移住者の稼ぎと送金により、生活は豊かになり、家の増改築が増え、新規のビジネスが見られる（飲食店、薬屋、ビデオや音楽の店）。アメリカのファッション、音楽も流布し、豊かになった家族は伝統的衣装を買い、家族儀礼を前より盛大に行うようになった。移住者もより頻繁に帰郷し、ムニシピオの祭りや行事に参加できるようになった（Rodríguez and Hagan 2000:202-206）。

移住者は同じキチェ民族、同じムニシピオ出身者が多いが、アソシエーションをつくらず、教会やクリニック、サッカー・チームなどを通じて相互扶助を可能にし、サッカー・チームが募金し故郷の祭りにも寄付を行うのである。プロヴィデンスの例より恵まれた例と見える。

3.6 ロサンゼルス、カリフォルニア州

1970年代、クチュマタン山地ウェウエテナンゴ県のカンホバル民族⁴⁾のサン・ミゲル・アカタンとサン・ラファエル（ともに、ムニシピオ）からの少数者がパイオニアである（この二つのムニシピオからは、ノース・カロライナ州のモーガントンの町の養鶏場へも行っている。サン・ミゲル・アカタンからはフロリダ州のインディアンタウンにも行った）。その後、男女、子供が続き、カンホバルは2000人ほどになった。1980年代、カンホバル難民が続く。その後、他のマヤ系民族（キチェが多い）が続き、1万以上のマヤが住むこととなった。ダウンタウンのバリオに集住し、衣料関係の労働者は1000人以上である。1986年、先住民マヤ組織がつくられ、以降、ムニシピオ、民族、宗教を超えた12ほどの組織が出現した。様々な活動があるが、死者の埋葬と故郷への移送が入っているのも特徴的である（Loucky 2000）。

3.7 サンフランシスコ、カリフォルニア州

マム、イシル (ixil), キチェ、カクチケル (kaqchikel)⁵⁾、カンホバル民族が来ている。エル・キチェとウェウエテナンゴ2県からの人々である。メキシコへの難民を経験してからアメリカへ渡った人もいるが、直接グアテマラから来た者もいる。前者の場合、メキシコ風のスペイン語と服装で安全を確保してきたうえ、サンフランシスコでもメキシコ人が多いので、そのスタイルを維持していると調査者は言う（Castañeda, Manz and Davenport 2002）。しかし、詳細は調査されていない。

上記の7例から読み取れるグアテマラのマヤの移動の特徴は以下の通り。①国境を二つ渡る苦労は大きいですが、難民から始まった移動は、今や経済的理由から止まらない。②移動には、ムニシピオと民族が縁となっている。しかし、ムニシピオ内の政治・宗教上の対立や母国での内戦がもたらした村と地域の分裂が影響し、ムニシピオや民族のアソシエーションはつくりにくい（とくにプロヴィデンスの例）。③一方で農場労働者は必要にかられて埋葬結社をつくる（モーガントンの例）。④場所によっては、居住コミュニティの集まりが機能し、結果として、同ムニシピオ・同民族出身者が集うことになり、故郷の祭りに資金を送ることもなる。故郷の町では、移民で得た資金で起業が始まり、町が潤い、アメリカ文化が適宜導入されている（ヒューストンのサン・クリストバル・トトニカパンの例）。⑤ムニシピオや民族を超えた汎マヤ組織への参加も報告されている（インディアンタウン、ロサンゼルス⁵⁾の例）。⑥ユニオンに参加するのは、農場労働者である（モーガントンの例）。

マヤはカンサス、アラバマ、コロラド州にも散在し、カナダでも、プリンス・エドワード島にも行っていると指摘されるが、調査研究例はまだない（Loucky and Moors 2000: 4）⁶⁾。

グアテマラの南の国境以南の国々の先住民のアメリカへの移動についての調査報告書、研究書、論文を入手できなかった。この地域に多い少数先住民族の場合、アメリカへの移動は少ないようである⁷⁾。このような現状のため、本稿では中米先住民のアメリカへの移動を題目としながら、結果として、メキシコとグアテマラの先住民の移動を主に扱うことになった。人口が大きく、移動例も多く、研究もやや進展しているからである。将来、グアテマラより南の地域の研究が増えることを期待している。

記述と論評を図にするとみえること —まとめの代わりに

中米、厳密にはメキシコとグアテマラの諸民族の共同体（ムニシピオ）から先住民が北のアメリカへと越境し、果敢にサバイバルし、故郷の家族へ送金し、ムニシピオに資金援助し、祭りや行政に貢献する姿を文献から描き出した。その力量は各民族、各ムニシピオが本国で置かれた社会経済状況とアメリカでの就業状態に左右されている。共通にして最大の越境の目的は個人が稼ぎ、送金することであり、故郷に戻ってから起業す

することもできる。アメリカの物品、音楽などが町に流入し、時とともに、移住者のアメリカでの異文化経験が活かされる日も来るだろう。それは、共同体にとって、プラスにもマイナスにもなるだろう。

人々のサバイバルのためのアソシエーションや相互扶助の努力を可視化すると図1のようになった(2000-2010年代の文献を拠り所として作成したが、時とともに事実も判断も変わりうる事象であることをこわっておく。なお、データ不足の例は文献であれば研究者の情報であれ、図から省いた。本図はあくまでも本稿の記述を理解しやすくする一助として作成しており、各例の詳細については本文に戻って確認されたい)。

左側にはメキシコとアメリカの主な支援組織と協力者を挙げ、それに頼って生存している3民族の農場労働者の例を列記した。

右側には、アメリカで先住民がつくるアソシエーションを列記した。ムニシピオが組織化の単位であり、民族が続く。

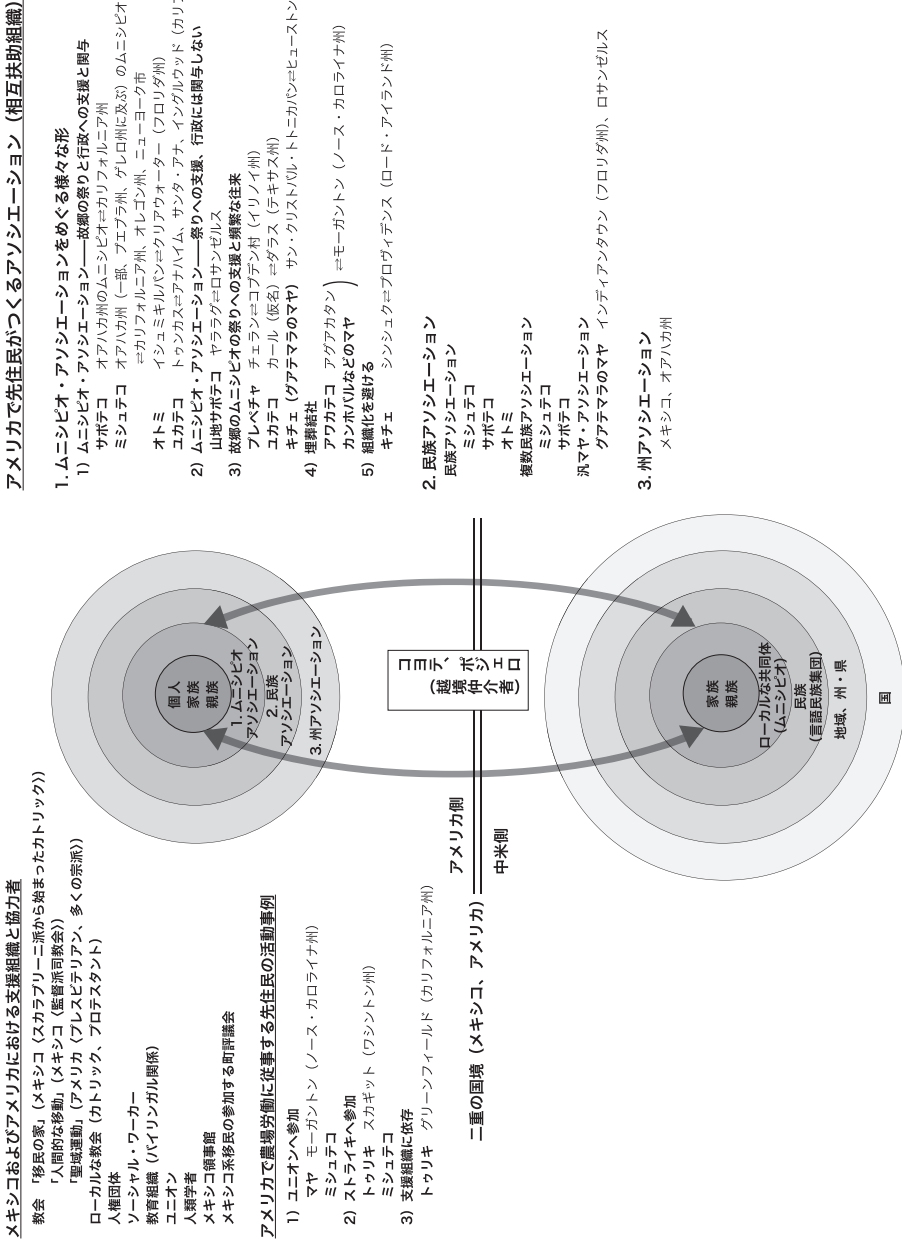
故郷のムニシピオは行政・宗教組織で維持されているので、この両方に送金し故郷の共同体に関与する場合もあるが(1-1)の例)、行政で政争などのある場合、移住者は宗教、つまり祭りに資金援助するにとどまる(1-2), 3)の例)。現実的な対応である。これら三つが頻度の多い形であり、残る1-4)は必要にかられてつくる埋葬結社であり、1-5)は民族的表出と組織化を避ける例である。

ムニシピオ・アソシエーションに次いで、民族、複数民族、汎マヤのアソシエーションが来る(2)の例)。州がアソシエーションの対象になるのは、政治的安定度のより高いメキシコにおいてである(3)の例)。このような組織形成のための様々な経験により移住者の組織力が養われ、視野が広くなり、帰郷時には、村や町や地域のために役立つだろう。

いうまでもなく、越境の経験には大きなマイナス面がある。越境の苦労、異文化社会の底辺で生きる苦労、故郷の喪失など、枚挙にいとまがない。移住しなくてもいい国を政治はつくらなくてはならない。さらに、受入国は移民労働者の貢献を考慮して、双方に適切な移民政策を展開しなくてはならない。

なお、本稿の記述はあくまでも文献のもととなる調査年代の状況に左右されており、移動をめぐる状況は年々変化し、大勢が変わることが大いにあることを付言しておく。

図1 越境先住民のアソシエーションと故郷のローカルな共同体・地域との関係
 アメリカで先住民がつくるアソシエーション (相互扶助組織)



(2000 ~ 2010 年代)に出版された文献で言及された例に基づき概念図。黒田 [2013] で扱ったミシュテコ、サボテコのムニシピオ名は省略)

謝辞

共同研究会「ラテンアメリカにおける国際労働移動の比較研究」に招き入れてくださった松久玲子同志社大学グローバル地域文化学部グローバル・スタディーズ研究科教授には謝意を表したい。メンバーの方々と知り合い、新しい調査・研究に接することができた。

メールを通じて質問に答えてくださった中川正紀、中川智彦、小林貴徳、近藤宏、額田有美、川本直美の諸氏（所属は注に明記）には「感謝」です。

原稿、地図・図の度重なる修正には編集工房 is の石川泰子さんのお世話になった。皆様、ありがとうございました。

注

- 1) ラテンアメリカでは、言語により民族的なかたまりが分類されている。これを言語民族集団というか民族というかは、議論は限りなくある。いろいろな意見を鑑み、初出では言語民族集団と表記した。これは国家の下位集団であるので、民族集団と書いたメキシコの学者も多い。現実を表している。1990年代、民族自治運動が進展し、国連の先住民支援政策も大きく影響し、民族の独立性を示唆する民族 (pueblo, peoples) が公的に採用された。これを踏襲し、本稿でも、民族と以下に記す。各民族の概要については、綾部恒雄監修『世界民族辞典』(弘文堂, 2000) を参照されたし。民族の表記、とくにグアテマラのマヤの民族名は、異なる表記が多いので、*Encyclopedia of World Cultures Vol. VIII, Middle America and the Caribbean*. Boston, Mass.: G.K.Hall & Co., 1995 の表記に統一して初出時に () 内に記し、以降は片仮名表記とした。
- 2) 川本直美氏 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程在学中) からの情報 (2017年4月23日「移民と村の関わりについて」(A4, 5枚), 10月25日, 30日, 2018年5月24日のメール)。
- 3) 小林貴徳氏 (関西外国語大学短期大学部准教授) からの情報 (2017年3月28日のメール)。
- 4) 映画「エル・ノルテ」はロサンゼルスに来たカンホバル民族の兄妹の物語。
- 5) 映画「火の山のマリア」はアメリカに向かう恋人と不縁になるカクチケル民族の女性の物語。
- 6) ガリフナは、そのアフロ性の高さとかリブ海から中米大陸部への移動を重視し、本稿では扱わない。議論は多くある。
- 7) 中川正紀氏 (フェリス女学院大学文学部英語英米文学科教授)、中川智彦氏 (愛知県立大学非常勤講師) からは、エルサルバドルのピピルほか先住民に関わりを意識している移民がロサンゼルスとサンフランシスコに少人数いる、とお知らせ頂いた (2018年1月13, 17日のメール)。
額田有美氏 (国立民族学博物館外来研究員、日本学術振興会特別研究員) からは、調査地コスタリカのブリブリのカバグラ先住民居住区で数件のアメリカへの移動例がある、と伺った (2017年3月28日, 11月18日のメール)。
近藤宏氏 (早稲田大学教育総合科学学術院 教育学部複合文化学科学科助教) からは、調査地

パナマのエンベラ＝ウォウナン特別区の集落ではアメリカへの移動に意欲のある青年もいる、と伺った（2017年春の手紙、11月18日のメール）。

参考文献

- ・ オアハカ州の文献については、後に記載する黒田（2013）の第6章「先住民の移動とローカルな共同体・地域の変革の可能性——オアハカ州のトランスボーダーとトランスナショナルな移動の例から」を参照されたい。
 - ・ 次の二書に所収された複数の論文を活用した。表記の重複を避けるために、論文名の後は、編者・年代・頁数のみを記した。
- Fox, Jonathan and Gaspar Rivera-Salgado (eds.) (2004) *Indigenous Mexican Migrants in the United States*. La Jolla, California: Center for U.S.-Mexican Studies, UCSD.
- Loucky, James and Marilyn M. Moors (eds.) (2000) *The Maya Diaspora: Guatemalan Roots, New American Lives*. Philadelphia: Temple University Press.
- Adler, Rachel H. (2004) *Yucatecans in Dallas, Texas: Breaching the Border, Bridging the Distance*. Boston: Allyn and Bacon.
- Anderson, Warren D. (2004) "P'urépecha Migration into the U.S. Rural Midwest: History and Current Trends," Fox and Rivera-Salgado (eds.) (2004), pp.355-384.
- Bonfil Batalla, Guillermo (1990) *México profundo: Una civilización negada*. México: Grijalbo.
- Burke, Garance (2004) "Yucatecos and Chiapanecos in San Francisco: Mayan Immigrants Form New Communities," Fox and Rivera-Salgado (eds.) (2004), pp.343-354.
- Burns, Allan F. (2000) "Indiantown, Florida: The Maya Diaspora and Applied Anthropology," Loucky and Moors (eds.) (2000), pp.152-171.
- Castañeda, Xóchitl, Beatriz Manz y Allison Davenport (2002) "Mexicanization: A Survival Strategy for Guatemalan Mayans in the San Francisco Bay Area," *Migraciones Internacionales* Vol.1, Núm.3, pp.103-123.
- Cohen, Jeffrey H. (2004) *The Culture of Migration in Southern Mexico*. Austin: University of Texas Press.
- Cornelius, Wayne, David Fitzgerald and Pedro Lewin Fischer (eds.) (2007) *Mayan Journeys: The New Migration from Yucatan to the United States*. La Jolla, California : Center for Comparative Immigration Studies, UCSD.
- Cruz-Manjarrez, Adriana (2013) *Zapotecs on the Move: Cultural, Social and Political Processes in Transnational Perspective*. New Brunswick: Rutgers University Press.
- de la Fuente, Julio (1949) *Yalálag: Una villa zapoteca serrana*. México: INI.
- Fink, Leon (2003) *The Maya of Morganton: The Work and Community in the Nuevo New South*. Chapel Hill, N.C., University of North Carolina Press.
- Fink, Leon and Alvis Dunn (2000) "The Maya of Morganton: Exploring Worker Identity

- within the Global Marketplace,” Loucky and Moors (eds.) (2000), pp.175-196.
- Fischer, Edward F. and R. McKenna Brown (eds.) (1996) *Maya Cultural Activism in Guatemala*. Austin: University of Texas Press.
- Foxen, Patricia (2007) *In Search of Providence: Transnational Mayan Identities*. Nashville: Vanderbilt University Press.
- García, María Cristina (2006) *Seeking Refuge: Central American Migration to Mexico, The United States, and Canada*. Berkeley: University of California Press.
- Hagan, Jacqueline María (1994) *Deciding to be Legal: A Maya Community in Houston*. Philadelphia: Temple University Press.
- Hendricks, Tyche (2010) *The Wind Doesn't Need a Passport: Stories from the U.S.-Mexico Borderlands*. Berkeley: University of California Press.
- Hernández-Díaz, Jorge (coord.) (2007) *Ciudadanías diferenciadas en un estado multicultural: usos y costumbres en Oaxaca*. México: Siglo XXI.
- Holmes, Seth M. (2013) *Fresh Fruit, Broken Bodies: Migrant Farmworkers in the United States*. Berkeley: University of California Press.
- Huizar Murillo, Javier and Isidro Cerda (2004) “Indigenous Mexican Migrants in the 2000 U.S. Census: “Hispanic American Indians,” Fox and Rivera-Salgado (eds.) (2004), pp.279-302.
- Johnson, Paul (2004) “The Blossoming of Transnational Citizenship: A California Town Defends Indigenous Immigrants,” Fox and Rivera-Salgado (eds.) (2004), pp.385-399.
- Kearney, Michael and Federico Besserer (2004) “Oaxacan Municipal Governance in Transnational Context,” Fox and Rivera-Salgado (eds.) (2004), pp.449-466.
- Loucky, James (2000) “The Maya in the Modern Metropolis: Establishing New Lives and Livelihoods in Los Angeles,” Loucky and Moors (eds.) (2000), pp.214-222.
- Loucky, James and Marilyn M. Moors (2000) “The Maya Diaspora: Introduction,” Loucky and Moors (eds.) (2000), pp.1-10.
- Manz, Beatriz (1988) *Refugees of A Hidden War: The Aftermath of Countersurgency in Guatemala*. NY: State University of New York Press.
- Palma, Irene y Jacobo Dardón (2008) “La emigración de guatemaltecos a Estados Unidos: características, comportamientos, impactos e implicaciones políticas,” Villafuerte Solís, Daniel y María del Carmen García Aguilar (coords.) (2008) *Migraciones en el sur de México y Centroamérica*. México: Porrúa, pp. 93-122.
- Pressly, Linda (2016) “Cherán: The town that threw out police, politicians and gangsters,” BBC News, 13 October 2016.
- Rodríguez, Nestor P. and Jacqueline María Hagan (2000) “Maya Urban Villagers in Houston: The Formation of a Migrant Community from San Cristóbal Totonicapán,” Loucky and Moors (eds.) (2000), pp.197-209.

- Rus, Diane y Jan Rus (2008) "La migración de trabajadores de Los Altos de Chiapas a Estados Unidos, 2001-2005: el caso de San Juan Chamula,". Villafuerte Solís, Daniel y María del Carmen García Aguilar (coords.) (2008) *Migraciones en el sur de México y Centroamérica*. México: Porrúa, pp. 343-382.
- Sassen, Saskia (2007) *A Sociology of Globalization*. NY: W.W.Norton and Company.
- Schmidt, Ella and María Crummett (2004) "Heritage Re-Created: Hidalguenses in the United States and Mexico," Fox and Rivera-Salgado (2004), pp.401-415.
- Stephen, Lynn (2007) *Transborder Lives: Indigenous Oaxacans in Mexico, California, and Oregon*. Durham: Duke University Press.
- Vogt, Wendy A. (2013) "Crossing Mexico: Structural violence and the commodification of undocumented Central American migrants," *American Ethnologist* Vol. 40, No.4, pp.764-780.
- Warren, Kay (1978) *The Symbolism of Subordination: Indian Identity in a Guatemalan Town*. Austin: University of Texas Press.
- (1998) *Indigenous Movements and Their Critics: Pan-Maya Activism in Guatemala*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Wellmeier, Nancy J. (2000) "La Huerta: Transportation Hub in the Arizona Desert," Loucky and Moors (eds.) (2000), pp.141-151.
- アバデアライ, アルジュン (門田健一訳) (2004) 『さまよえる近代—グローバル化の文化研究』平凡社。
- 黒田悦子 (2013) 『メキシコのゆくえ—国家を超える先住民たち』勉誠出版。
- 小泉潤二 (2007) 「マム 揺れるグアテマラの現代マヤ」黒田悦子・木村秀雄編『中米・カリブ海, 南米』講座世界の先住民民族 8, 明石書店, pp. 146-161, 所収。
- 小林貴徳 (2014) 「コラム 7 越境するメソアメリカ先住民」井上幸孝編著『メソアメリカを知るための 58 章』明石書店, pp.337-340, 所収。
- 柴田修子 (2014) 「チアパスのサバティスタ運動—自治区におけるコミュニティ再生の実践」石黒馨・初谷譲次編著『創造するコミュニティ—ラテンアメリカの社会関係資本』晃洋書房, pp.27-59, 所収。
- 清水透 (2013) 「砂漠を越えたマヤの民—揺らぐコロニアル・フロンティア」増谷英樹・富永智津子・清水透著『オルタナティブの歴史学』有志舎, pp.201-290, 所収。
- 敦賀公子 (2014) 「中米における近代国民国家形成と先住民—軍事政権下のエルサルバドルのナワ・ピピルの人々」井上幸孝編著『メソアメリカを知るための 58 章』明石書店, pp.290-294, 所収。
- 初谷譲次 (2009) 『アメリカス世界を生きるマヤ人—向こう岸からのメキシコ史』天理大学出版部。
- 三澤健宏 (2013) 「宗教と国際人口移動—ラテンアメリカのカトリック教会を中心に」早瀬保

子・小島博編著『世界の宗教と人口—人口学ライブラリー 13』原書房, pp.123-148, 所収。

